

with コロナの学校生活の始まりでいま必要なこと

石井英真（京都大学）

休校から分散登校を経て、週明けからほとんどの学校が通常授業を再開します。コロナの感染拡大も落ち着いている状況で、コロナ禍に関するマスコミ報道も全体的に少なくなっているように思います。その中で、さまざまに不安を抱えながら週明けを迎えようとしている人たちがいます。分散登校を経て一度は学校に行ってみたもののやはり学校に行きづらいつ感じている子どもたち、そして、そうした子どもたちの様々な困難に向き合いながら、後述するような状況で、「働き方改革」とはほど遠い状況に追い込まれようとしている教師たち。私の見聞する限りにおいてですが、いま見えにくくなっている現場の状況、そしてそこで大事にしておきたいことを、まとめてみたいと思います。

1. 授業を通して子どもたちの「こころの温度」を上げ、信頼とつながりをつくっていく

不登校気味だった子どもたちも、オンライン授業や分散登校には出てくるようになったという話をしばしば耳にします。「引きこもり」状態が標準となり、学校や友達等との間に程よい距離感ができたり、自由度が生まれたりしたことも関係しているのでしょうか。しかし、分散登校も進む中で、再び学校に行きづらくなっている子どもたちが増えることが危惧されます。

不登校気味の子どもたちでなくても、子どもたちの多くはストレスや緊張感が高まっています。それに加えて、体育祭、文化祭、修学旅行等の行事、そして、部活動の最後の大会もなくなって、学校生活にメリハリをもたらす見せ場や節目がなくなり、いろんな意味でケジメをつけられず、もやもやを抱えながら、モチベーションも上がらないまま、子どもたちはずるずると学校生活を送ることになります。

従来の行事に代わるものを、子どもたち自身も交えて、むしろ子どもたち主体で考えてみる取り組みは重要です。しかし、それでもなお、授業のあり方が学校生活の鍵を握るという状況が、今まで以上に高まることは間違いありません。中学校であれば、一時間を45分に分けて7時間で実施する、数学が一日三時間ある、そんな状況も生まれうる中、授業がただ時数をこなしたり、内容を網羅したりすることに終始するなら、区切りをつけられないまま進路の不安も抱える最終学年はもちろん、新入生も、新生活のワクワク感を感じられないどころか、小学校って、中学校って、高校ってこんなにつまらないものなのかと、学校に失望してしまうかもしれません。不登校気味の子どもたちはこれまで以上に学校に来たくなくなるでしょうし、不登校の子どもがさらに増えること、静かな荒れの発生、精神的不調などが危惧されます。

授業は最大の生徒指導や荒れ対策だと言われたりしますが、まさに今この点を確認して

おく必要があります。授業を進めないといけない、子ども同士のやりとりも難しいということをお口実にして、ただ先生が一方的に話すだけであったり、問題を解いてこなすだけであったりする授業になっていないでしょうか。教科書すら開けずに、ノートに思考をまとめることもせず、すなわち、意味理解や思考を深める活動などを省略して、ただプリントを穴埋めするだけの、ワクワク感も彩もない文字通り無味乾燥な授業になっていないでしょうか。

子どもたちを飽きさせないために実習やグループ活動でお茶を濁すようなこともできなくなり、このような状況だからこそ、教材のネタや教材提示や授業の組み立ての工夫が重要です。たとえば、アルファベットを学び始める中1の英語の授業、大文字の意味について、学校のいたるところに掲示されているSDGsという言葉が、英語の頭文字を並べたものだと確認するとともに、ニュースで見かけるCOVID-19の意味をたずね、それも英語の頭文字をとったものだと説明する。さらに、GAFATって知っているか問いかけ、大型モニターに、グーグルやアマゾンなどのロゴを映し出しながら、その意味を確認する。

そこでは、子どもたちの生活と結び付けながら、社会に目を開いていく志向性ももって、記号ではなく生きたことばとして、子どもたちと英語との出会いの場がアレンジされています。こうして、教科の内容の本質を見極め、子どもの生活と結びつけ、手持ちのツールを最大限に生かすところに、ちょっとした工夫であっても、彩のある授業が生まれ、子どもたち、そして教師の「こころの温度」も上がるのです。

また、こうして教材や授業の組み立ての工夫によって、子どもたちと教師の間に信頼とつながりを生み出す一方で、授業を通して、子どもたち同士のつながりを生み出していく視点を忘れてはなりません。場と経験を共有したり、休み時間などに友達と話したりすることの積み重ねは、教室に交わりとつながりを生み出しますが、授業における共通の題材をもとにしたパブリックなコミュニケーションを通してこそ見えてくる友達の意見や顔、そこで構築されていく信頼関係や文化の存在も重要です。

子ども同士の交流という点について、現状ではむしろ学校という場で密を避けて学ぶよりも、オンライン授業の方が双方向でのやり取りがやりやすいくらいかもしれません。登校時でも学校内でICTを駆使して子どもたちの学びの双方向性を担保できるのであれば、そういう取り組みを進めていけばよいでしょう。しかし、ICTを使った〇〇というツールがなければ子どもたちのつながりをつくれないう技術頼みではなく、やれることはいろいろとあると思います。

子どもたちの考えやその表現をホワイトボードにまとめて、黒板等で共有しながら、教師と子どもの問答を軸に、それぞれの子どもの発言をつなぎながら構成する、日本の伝統的な練り上げの授業を展開することはできるでしょう。各人の意見が書かれたホワイトボードやワークシートや作品を机の上に置いておいて見て回る、筆談で言いたいことを伝えようとするなど、お隣との話し言葉でのやりとりが制約された中だからこそ生まれてくる新たな教育文化もあるかもしれません。かつて戦争で肺を侵され大声が出せなくなったフランスの教師、フレネ (Celestin Freinet) が、教室に印刷機を持ち込み、子どもたちの自由作

文を生かした学校印刷所、学校間通信などの実践を生み出したように。

非常時だからこそ、授業づくりの軸がブレていないか再確認が必要です。不登校の子どもたちを増やさず、むしろ学校に通いたくなるような、そんな授業づくり学校づくりの原点を見失ってはいけません。

2. 第二波、第三波への備えは、自治体の思い切ったインフラ整備と教師の ICT いじりで

これまでも何度か述べてきたように、学校再開に向けた動きの中で、休校期間中の出来事や、オンライン授業などもなかったことのように、コロナ以前に戻ろうとする動きも見られます。しかし、ここで備えを怠り、次の感染拡大で同じように学校が身動きが取れない状況に陥ったりすることに対して、ストレートな言い方をすれば、保護者や社会からすると「次はない」という気持ちなのではないでしょうか。オンラインでつながっているのが当然でそうでなければ批判は免れない、次の局面はそのような状況になるでしょう。

ただ、三か月間の休校期間にオンラインの取り組みが進まなかった原因は、現場の不慣れ、家庭のネット環境や機材の不足以上に、特に公立学校に関しては、自治体単位でのシステムのキャバや、学校の外に端末も持ち出せず、極めて不自由で内向きな情報セキュリティポリシーなどの障壁が大きかったように思います。閉鎖的で内向きなシステム構築のベクトルを、一般社会での通用性を高め、教師の在宅勤務等も可能にする方向へと転換していくことが必要ですし、そこにこそまずリソースを割く必要があります。

それなくしては、ハード面の条件が整って、端末が配備されても生かせません。逆に、学校が家庭や学校外とオンラインでつながるシステムさえ構築できていれば、仮に一人一台のタブレット等が配備されていなくても、既存の学校や家庭のリソースを生かし切ることで、休校中もオンラインでのつながりや学びを保障していくことはできるでしょう。Wi-Fiも含めたネット環境が整っていない家庭は、どの学校でも一定割合存在しますが、その割合は思ったほどには高くはなく、仮に現状で1割程度（この割合はさらに低くなることが予想される）であれば、その子たちについて、学校で場所や端末を提供するなど、対応は可能なように思います。

各自治体が確実に上記のような条件整備を進めていく一方で、各学校において、教師たちも、いろんな場面で ICT をいじってみる機会を増やすことが重要です。この状況で、無理にオンライン授業をやるというのは必然性に欠けますが、全校集会などを、学内でオンラインでやってみてもいいでしょうし、特に、生徒会活動や行事などの自治活動においてこそ、子どもたちに委ねてみれば、彼らの方が自由に機器やツールを使いこなして、新しい取り組みを進めてくれるでしょう。そこから教師が教えられることも多いと思います。オンラインでの課題や連絡事項などのやりとりを始めていたのであれば、家庭との連絡などに継続して使えばよいでしょう。とにかく、少なくともオンラインのつながりを、学校生活の中や家庭との間に通わせておくこと。一度通わせておけば、いつでも立ち上げられます。

さらに重要なのは、ICT をいじってみること。車でもゲームでも携帯でも、なんでもいじ

っているうちに身につくものです。遊び感覚で使うという点からすると、試しにオンライン懇親会でもやってみる、そんなところから始めてみるとよいでしょう。職員同士で、あるいは、学校運営協議会で保護者や地域の人たちも交えたりして。やってみると、なんだこんなものかと気づくはずです。懇親会なら、失敗も許されますし、勢いでいろいろとボタンをいじってみて、そこから気づくこともあるでしょう。

ICTの活用については、その実践やツールの紹介が過度に「未来形」のテンションを装っているために、機械に弱い人には遠いもののように感じて、それが取り組みを躊躇させてしまっているところもあるように思います。しかし、実際にやってみると、少なくとも一般向けのツールについては、ユーザビリティを大事にするので使い勝手もよいものですし、それが万能薬のようなものでないことも見えてくるでしょう。

オンラインを経験したことがないからこそ不安も大きくなるのであって、大人たち自身が、遊びながら試行錯誤してみることで、その可能性もリスクも体験的に学ぶことができ、心理的なハードルは大きく下がり、食わず嫌いもなくなります。そうして慣れておきさえすれば、この状況で今無理に子どもを交えてオンライン授業をすることは難しくても、いざというときに、システムさえ整っておけば動けるようになっていると思いますし、何より、一度そのうま味を覚えたら、登校時にも子どもたちのために授業などで使ってみようと思うでしょう。

大人の生活と学びにICTやオンラインを溶け込ませていくこと、それは子どもたちにも返っていくでしょうし、業務のスマート化による教師の働き方改革に向けたインフラ整備にもなります。オンラインは仕事を効率化できるでしょうし、まさにzoomは遠距離恋愛のためのツールとして生まれたのであって、遠く離れた人と人をつなぐ力は持ちます。この特性を生かして、外部講師を招いての校内研修や、教育委員会等が主宰する研修会や講演会等において、教師たちの慣れと経験学習のために、意識的にオンラインを活用していくことはもっと進められてよいでしょう。

オンラインでの授業や仕事について、この数か月テレワークやオンライン授業をずっとやってきた大学教員の一人として、会議や打ち合わせ、そして大人向けの研修（ある程度学ぶ力とモチベーションのある人向けの専門的な知識獲得、あるいは経験の省察による気づき）などには有効活用できそうだと感じています。一方で、学ぶ力やモチベーションも育てながら、何かを学び手に残し、腹落ちする認識（わかること）を通して人を育てる、人間教育という目的においては、物足りなさや限界を感じている部分もあります。

近代教育学の祖、ヘルバルト（Johann Friedrich Herbart）は、教師の臨機応変の応答性や対応力を意味する「教育的タクト」を、教師に対する最低限の要求でありかつ最大限の要求であると述べました。授業や学習支援という点からすると、オンラインは実践の質の追求につながる最大限の要求とは言えないまでも、最低限の要求ではあるように思います。インスタントラーメンは、それに固有のよさがありますし、プロは何でもそれなりにアレンジしながらさばけないといけないと思いますが、それで名店のホンモノのラーメンはめげせない。

比喩的に言えば、こだわりを捨てたところに新たなジャンルやサービスの形が生まれる可能性も模索しつつですが、専門職として究めるべき部分は見失ってははいけません。

3. 教師が子どもたちの学びとケアに集中できるよう、周辺業務をヘルプし挑戦を見守る

マスクで顔が見えない中、かすかな表情やしぐさから子どもたちの不安や緊張感やストレスを感じ取りながら、休校中に生じた学習面での格差などにも対応しつつ、授業で勝負していかなければならない教師たち。それだけでも大変なことがある程度想像できるかと思えますし、そのために準備や余裕も必要だということも見えてくると思います。しかし、実際には、消毒作業に追われ、小学校などでは、密を避けつつで準備の時間を短縮するために、給食の配膳も教師がやらざるを得ない、パソコンのキーボードやタッチパネルの消毒はどうするのか、プリント配布についても教師が一枚一枚配っていたところ、子ども同士で回してもよいと指針が出て安心したなど、授業以前の子どもたちの安全確保のための周辺業務が膨れ上がり、そこに教師たちは心のキャバを割くことになっています。私が聞いたある教師の一言、「来週以降も不安しかない」、それは今の現場のリアルでしょう。

なかなか人を見つけるのも一苦労なのですが、PTA や学校運営協議会などにも協力してもらいながら、予算措置も含め、周辺業務を担う人材の確保は急務です。こうして、子どもを総合的に支援すべく、教師たちが授業の準備に集中し、子どもの生活を見守る余裕が持てるよう、教員数のさらなる増員も含めた、条件整備が必要です。

また、オンラインの取り組みや学びやケアの保障のための新たな取り組みなど、リスクをとって挑戦して何か起こったら学校を責めるのではなく、学校を信じて見守り、時には、他の保護者や地域の人々の袖を引っ張って、挑戦をサポートするような、学校や教師の応援団が、保護者や地域の中に生まれてくることを期待します。学校の取り組みに何か疑問がある場合も、何か事情や意図があると思って、おかしいじゃないかと言う前に、まずは学校や教師の話を聴いてみることで、逆に学校側も、学校や子どもたちの状況、および自分たちの趣旨や想いの説明を丁寧にしていくことが大事でしょうし、ヘルプを出して学校に当事者意識をもって関わる人を増やすことで、相互理解も進むでしょう。

学習面については、学習指導員や ICT 等の活用も考えられてよいでしょう。しかし、「学校再開を進める際に確認しておきたいこと—『with コロナ』の経験を『公教育のバージョンアップ』につなぐために—」(<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/>)でも論じたように、あくまでそれは補助的なものであり、教師を支える体制を整えることが本丸です。いわゆる「民間」で提供されるコンテンツやプログラムやサービスは、それぞれに特化した問題意識と強みを持っているのであって、それらをうまく組み合わせても、そこからこぼれてしまうものが出てきますし、特に、複合的なニーズを抱える本当にしんどい子どもたちに届きにくい部分もあるように思います。

密を避けてという状況で、学習アプリ等で学習を個別化する取り組みも進むかもしれませんが。しかし、学習アプリの活用は、場を共有していることから自ずとつながりが生ま

れ、そうして生まれた子ども同士の支え合い、学び合いに補われながら、ゆるい教室の空気感と学びの効果を生み出すのです。そもそも密を避けた状況で、それに頼りすぎてしまうと、孤立化された上に機械的なドリル学習となるでしょう。これでは子どもも教師も「こころの温度」は上がりません。また、スマホに子守をさせる際に気をつけないといけない、中毒性のリスクや健康上のリスクなども考えておく必要があります。ただ、とことんそれをやりきったら、子どもたちの方が飽きたり音を上げたりするかもしれません。

こんな学校なら行きたくない、こんな授業なら外注したほうがいい、動画コンテンツや「AI先生」の方がましだと子どもたちから言われたいよう、子どもの深層の複合的なニーズに寄り添い、学ぶ権利の保障を軸にしながら、学びとつながりとケアとのベストミックスを探っていく。そうした、学校という場で子どもたちと暮らしをともにするからこそ可能になる、学校と教師が担ってきた、あるいは担いうる仕事の意味を再確認する必要があるように思います。そうした人間的な仕事に注力することによって、教師の側も自分たちの仕事に手ごたえを感じることができるのではないのでしょうか。